■日　時：２０２０年３月２９日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「一粒の麦は、死ねば、多くの実を結ぶ。」
■説教者：飯島　信 牧師
■聖　書：旧約 イザヤ書 63：1－9（旧 p1164）
　　新約 ヨハネによる福音書 12：20－36（新 p196）
■讃美歌：211「あさかぜしずかにふきて」566「むくいを望まで」

お早うございます。
私が就任してから、初めて一桁の方々との礼拝です。でも、静かな中で、じっくり落ち着いてメッセージを語れるように思います。
来週は 4 月の第 1 主日です。いよいよ 2020 年度が始まります。本来なら、進学や就職など、華やかな気持で迎えるはずの 4 月が、今は新型コロナウイルスの問題で、お祝いどころか、日本全体が落ち着かない日々を過ごしています。私は、皆さんと同じく、私にとっても生まれて初めての経験をする中で、この時にしか学ぶことの出来ないことをしっかり学び取りたいと思っています。

幾つか経験した中で、初めてのことがありました。食料品についてのことです。
パスタを購入したいと思い、良く行く業務スーパーに行きました。小池知事が週末の外出を自粛して欲しいと語った翌日の木曜日のことです。まず気が付いた事は、いつもの時間帯と比べて、お店の前に駐輪している買い物客の自転車の数の多さです。自分の自転車を置く場所を見つけるのに苦労しました。次に、入店して、求めていたパスタはあったものの、いつもはあるはずの具材で欲しかったミートソースの棚は、他のソースの具材も含めてほとんどが空でした。辛うじてナポリタンのが 2 つだけ残っていたので、それを購入しました。
翌日の金曜日、今度は比較的早くお店に行きました。昼前でしたが、ミートソースは 3 袋だけ残っていました。一度は 3 袋全部手に取ったものの、次に買いに来る人のことを考えるとそれは出来ないので、2 袋だけ購入しました。又、食パンも購入しようと思っていたのですが、食パンだけでなく、菓子パンも置いてある棚がほとんど空っぽで手に入れることが出来ませんでした。食パンは、昨日になって別の店で買いました。
いずれにしてもスーパーの人の多さや、パスタのソースの具材やパン類がすぐに無くなるなど、これが食料品パニックの始めだと言うことが分かりました。

では、このような時にどうしたら良いのかを考えます。
やはり、正確な情報をつかむ以外に無いと思います。
買いだめをしない内に流通機構がストップしたらどうするのか。ストップしてから買おうとしても遅いのではないのか、と言う心配があります。

私は、その心理が買いだめへと人を走らせるのだと思います。
大きな天変地異や戦争でも起きない限り、流通機構がストップすることはありません。
皆が買いだめをしなければ、普段通りの生活が出来ます。
それを生活のルールとすることが大切だと思いました。

2011 年の東日本大震災の時は、被災地では、今日のように寒く、みぞれまじりの雪さえ降っていました。その中で、先を争うことなく、静かに列をなして、水や食料品の配給を待つ現地の人々の姿が世界から賞賛されました。
私たちには、それをする力がある。そう思います。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉を見てみたいと思います。
ヨハネによる福音書 12 章 20－36 節、新共同訳聖書の 196 頁です。
この中でも、24 節から 26 節について、この御言葉の意味するところを考えたいと思います。

２４：はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。
２５：自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。
２６：わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。

イエス様が語られたこれらの言葉が意味していることは明らかです。
24 節の“一粒の麦”とは、イエス様ご自身のことで、“地に落ちて死”ぬとは、私たちの罪を背負って、身代わりとなって十字架に架かること、そして“死ねば、多くの実を結ぶ”とは、十字架の死によって私たちの罪が赦され、永遠の命に至る救いの道が開かれることです。

次の 25 節です。
“自分の命を愛する者は、それを失う”の“それ”とは、神の国に至る永遠の命のことです。つまり、自分のこの世での命を大切に守る者は、永遠の命を失い、この世での自分の命を神の国のために捨てる者は、永遠の命を得ると言うのです。

そして、26 節です。
主イエス・キリストに仕えようとする者は、その教えを生きよ。そうすれば、神様は、そ

の人を御手の内に守り、その歩みを導かれると言うのです。

私たちは、これらのイエス様が語られる言葉が、何を意味しているのかは頭で理解出来ます。しかし、問題は、イエス様が語られるこの言葉の通りに生きることが出来るかどうかが問われています。「ああ、分かった」ではなく、これらの言葉を生きること、つまりイエス様に従うことが、どんなに困難なことかを知っているかです。

“自分の命を愛する”とは、自分に固執することです。
神様の御心を尋ね求めるのではなく、全てのことに自分の思いを優先させることです。
自分を常に正しいとし、間違いを認めず、自分以外の他の人を裁くことです。
私たちは、誰一人例外なく、そのような存在です。
イエス様は、そうした私たちの現実を全てご存知です。

その上で、なお、語られるのです。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」と。

“命を憎む”とは、この世での命を捨てることです。
この世での命とは、富、名誉、名声を追い求める命です。
自分だけを愛し、自分だけを正しいとし、過ちを認めず、他人を裁く命です。
常に自分に関わる人や物を他の人や物と比較し、優劣をつけ、自分の利益を求める命です。
そのような自分をそのままにしておくならば、神の国に入る永遠の命を失うとイエス様は言われました。

自分のこの世の命を愛し、永遠の命を捨てるのか、それとも、この世の命を捨て、永遠の命を得るのか、私たちはどちらかを選び取らなければなりません。

この時、ふと思うのです。
イエス様の十字架をです。
あの十字架に架けられたイエス様のその姿を思い浮かべるのです。
一体何のために、イエス様は十字架に架けられたのかと。
あの十字架の意味は何であったのかと。
私たちは、その意味を知らされています。
そうであるなら、私は、自分のこの世での命を愛することなど、出来るはずはありません。
私たち一人ひとり、この世での命を捨て、永遠の命を得る、そのような者となるために、イエス様は十字架に架けられたのです。

弱き、従い得ない己をもなお愛して下さるイエス様の十字架を仰ぎ見て、この世の旅路を歩み続けたいと思います。

祈りましょう。